



2022年3月1日 IHF 通知
2022年3月17日 JHA 通知

(公財) 日本ハンドボール協会 競技・審判本部
競技規則研究専門委員会

国際ハンドボール連盟 競技規則審判委員会は、2022年3月1日に新競技規則を発表しました。国際ハンドボール連盟では、この新競技規則を2022年7月1日より施行する方向です。

主な変更は、大きく4つです。

- 1 ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用 **※新設**
- 2 ボールサイズ (外周) について、松やにの使用の有無で分類 **※新設**
- 3 スローオフエリア **※新設**
- 4 パッシブプレーの予告合図後、パスの最大回数の変更

(公財) 日本ハンドボール協会競技・審判本部では、国際大会のカレンダー (IHF, AHF) を参考にしながら、ナショナルチームへの対応も考慮し、その運用に関して、

- 1) 「2022年7月1日より国内全ての大会で実施すること」
- 2) 「2022年7月1日より運用については各連盟の判断に任せること」
- 3) 「上記2) の2023年4月1日から運用について」

の3つに大別し、国内での運用を以下の通り定めることとします。

※各連盟に一任しているところについては、各連盟で検討され、その運用の有無について、大会要項に記載してください。

- 1) 2022年7月1日より国内全ての大会で実施すること。
 - ①ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用
(安心・安全な競技運営のため、国内全ての大会で運用することとします。)
 - ②ボールサイズ (外周) について、松やにの使用の有無で分類
- 2) 2022年7月1日より運用について、各連盟の判断に任せること。
 - ①スローオフエリア (使用する か 使用しないか)
 - ②パッシブプレーの予告合図後、パスの最大回数の変更 (6回 または 4回)
- 3) 上記2) の2023年4月1日から運用について
 - ①スローオフエリアの使用については、各連盟の判断に任せます。(継続)
 - ②パッシブプレーの予告合図後、パスの最大回数は4回とします。

以下に、新競技規則の変更の概要を記載します。なお、新競技規則書 (日本語版) については、6月1日の発行にむけて、現在翻訳作業を進めておりますのでご了承ください。

新競技規則変更の概要

1 ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用 ※新設

明らかな得点チャンスの際に、打ったシュートがゴールキーパーの頭部に直撃した場合は、競技規則 8 の 8 により、即座に 2 分間退場を判定すべきスポーツマンシップに反する行為とする。



ゴールキーパーの頭部にボールが直撃したことに対する判断基準

- ・明らかな得点チャンスの際のみ適用される。明らかな得点チャンスとは、シュートを打つプレイヤーとゴールキーパーの間に、防御側プレイヤーが誰もいない状況を意味する。
- ・ボールが直接ゴールキーパーの頭部に当たった場合のみに適用する。ボールがゴールキーパーの頭部以外に当たった後、跳ね返り、ゴールキーパーの頭部に当たった場合は、罰則は適用されない。

※ 2 分間退場を判定した場合は、ゴールエリアの外側から（ボールが頭部に直撃したゴールキーパーのチームの）フリースローで再開する。競技規則 13 の 1 (a)

※ 7m スローの実施において、ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した場合についての変更はなく、競技規則 8 の 9 (d) によりこれまで通り失格を適用する。

※ 明らかな得点チャンスの際、たとえディフェンスに接触されたとしても、ボールと体をコントロールできていれば、シュートしたプレイヤーに罰則を適用する。しかし、7m スローや罰則の適用となるようなディフェンスの違反によって、シューターがバランスを崩してボールをゴールキーパーの頭部にぶつけた場合は、罰則を適用しない。

【明らかな得点チャンスの際、シュートを打つプレイヤーとゴールキーパーの間に、防御側プレイヤーが誰もいない状況の一例】



ゴールキーパーが演技によりレフェリーの判断を欺く場合

- ・ゴールキーパーがレフェリーの判断を欺くために、演技を行った場合（例えば、ゴールキーパーの胸に直撃したにもかかわらず、顔に当たったように見せかける等）は、ゴールキーパーに対してスポーツマンシップに反する行為として、競技規則 8 の 7 (d) を適用する。

2 ボールサイズ(外周)について、松やにの使用の有無で分類

松やにの使用有無とチームの種別に応じて、使用するボールの外周と重さを次のように規程する。

(a) 松やにを使用する場合 (通常の規程)

松やにの代わりに粘着テープ等を使用する場合も含める

- ・成年，高校生の男子用のボール（3号球）
外周 58 ～ 60 cm，重さ 425 ～ 475 g とする。
- ・成年，高校生，中学生の女子用および中学生男子用のボール（2号球）
外周 54 ～ 56 cm，重さ 325 ～ 375 g とする。
- ・小学生用のボール（1号球）
外周 50 ～ 52 cm，重さ 290 ～ 330 g とする。

(b) 松やにを使用しない ※新設

これは、「松やにを使用しないために作られたボール」を使用する場合を意味する。

- ・成年，高校生の男子用のボール（3号球）
外周 55.5 ～ 57.5 cm，重さ 400 ～ 425 g とする。
- ・成年，高校生，中学生の女子用および中学生男子用のボール（2号球）
外周 51.5 ～ 53.5 cm，重さ 300 ～ 325 g とする。
- ・小学生用のボール（1号球）
外周 49.0 ～ 51.0 cm，重さ 290 ～ 315 g とする。



※ただし，ボールの規程について，日本国内では指導普及本部で別途検討・対応。

競技規則改訂における「ボール規程」変更に関して（第七報）（2022年3月7日付）

【日本国内でのボール規程】

号球	カテゴリー	周囲	重量	備考 (IHFが区分するカテゴリー)
3	成年，高校生男子用	58～60 cm	425～475 g	・成年男子 ・男子ユース（16歳以上）
2	成年，高校生女， 中学生男女用	54～56 cm	325～375 g	・成年女子 ・女子ユース（14歳以上） ・男子ユース（12～16歳）
1	小学生用	49.5～50.5 cm	255～280 g	・女子ユース（8～14歳） ・男子ユース（8～12歳）
2	中学生男子用	51.5～53.5 cm	300～325 g	・成年女子 ・女子ユース（14歳以上） ・男子ユース（12～16歳）
1	中学生女子，小学生男子用	49.0～51.0 cm	290～315 g	・女子ユース（8～14歳） ・男子ユース（8～12歳）
0	小学生女子用	46.0～48.0 cm	255～280 g	

※ 表内，色つきの箇所は，「松やにを使用しない場合」のボール規程（新規程球）です。

※ 3月15日現在，国内で3号球の製造販売はないとのことです。

※ 国内では，中学生大会・小学生大会において2022年度を「テスト・イヤー」と位置づけ，全国大会では新規程球を大会球として使用する予定です。

※ 詳細は，国内の各大会規程をご確認ください。

3 スローオフエリア ※新設

コートについて

「スローオフエリア」と呼ぶ直径4mの円を、センターライン中央に配置する。(図1b)



スローオフエリアは、以下のいずれかの方法で設ける。

- (a) プレーイングエリアの床とは異なる色で、直径4mのエリアを設ける。
- (b) 直径4mの円をラインで描く。

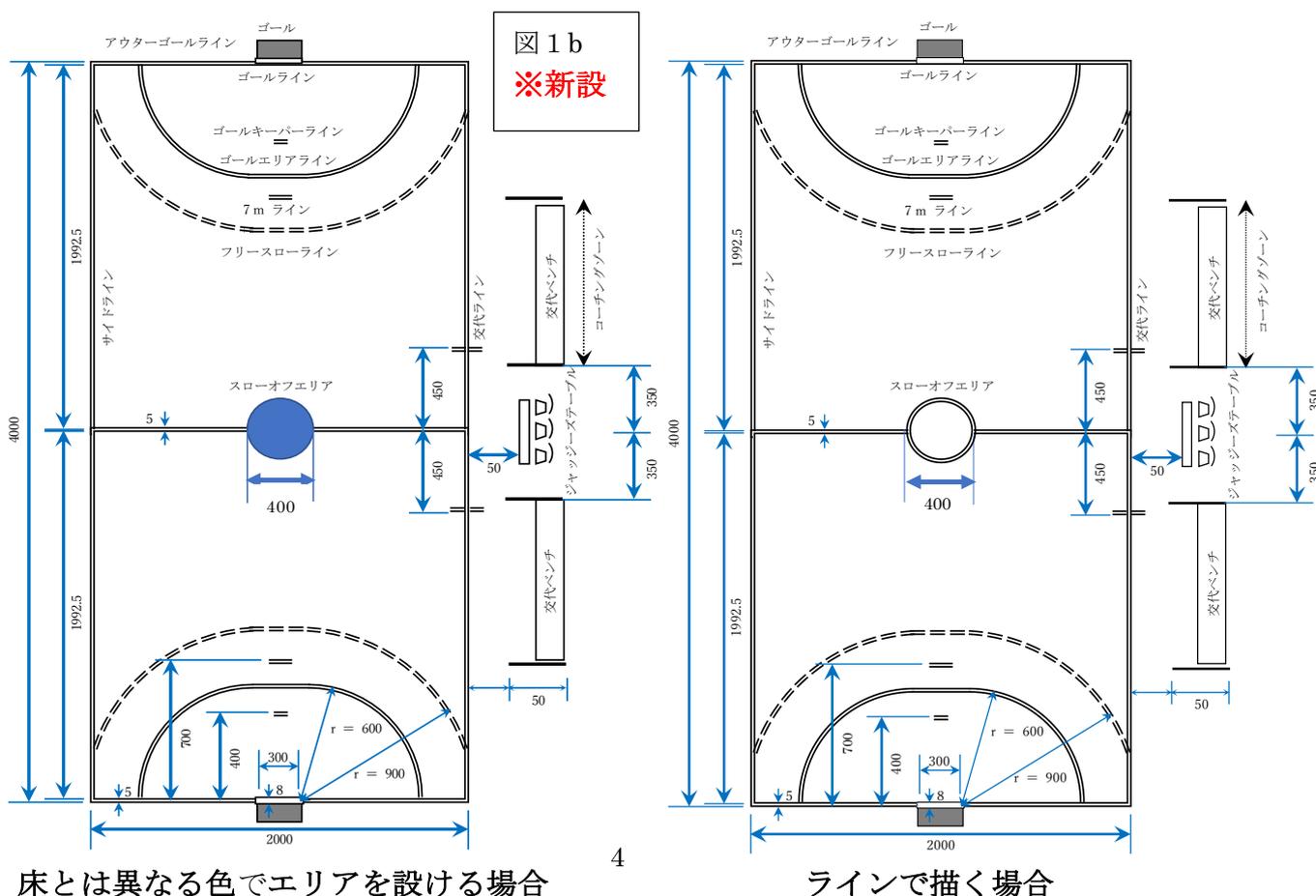
スローオフエリアは、国際ハンドボール連盟主催の大会やシニアのプロリーグにおいては必須とし、大陸連盟大会または国内大会においては、主催者の判断で決定できる。

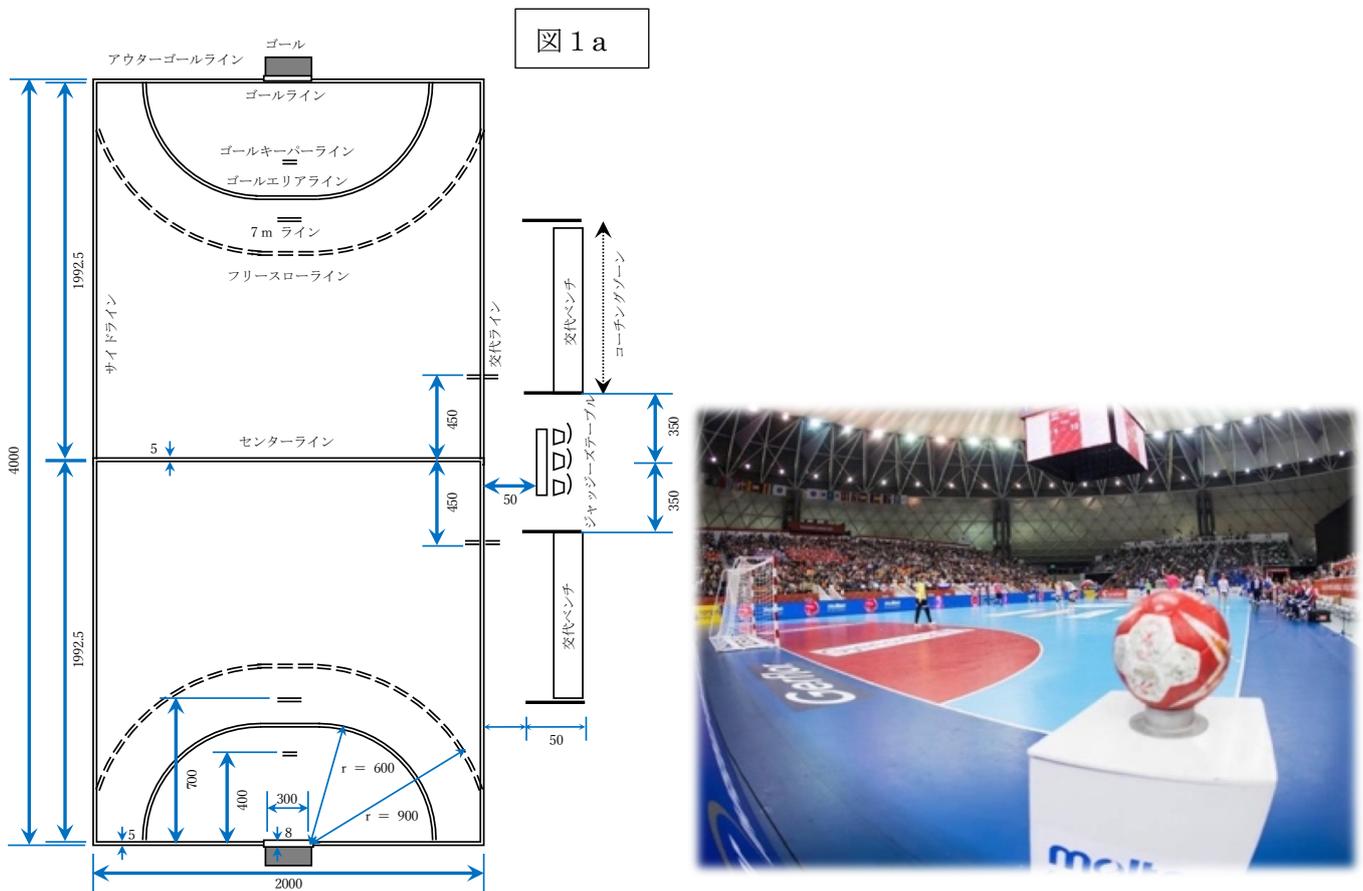
※条文ではスローオフエリアは「(a)プレーイングエリアの床と異なる色」とあるが、国内大会においては、直径4mの円を描くことも認めることにします。

※スローオフエリアのコートを採用しない場合は、今まで同様センターラインを引くことになります。(図1a)

※スローオフエリアのコートを採用する際、コート中央に、広告・チームマスコット等を掲示する場合は、スローオフエリアのサイズに合わせて、直径4mに合わせて作成することを推奨します。

※令和4年(2022年)度内に、スローオフエリアのコートを採用する各全日本大会の主催者は、ブロックおよび都道府県における予選大会のあり方も決まってくるので、スローオフエリアのコートを使用することを大会要項に明記し、通知してください。





スローオフエリアのコートでのスローオフの実施方法

- (a) スローオフエリアからどの方向へもスローオフを行ってもよい。
笛の合図から 3 秒以内にスローオフを行わなければならない。
- (b) ボールがスローオフエリアの中にあり、少なくともスローオフを行うプレイヤーの片足がスローオフエリアの中にあるとき、レフェリーはスローオフの笛を吹くことができる。
- (c) スローオフを行うプレイヤーは、スローオフが完了したとみなされるまで、スローオフエリアラインを踏み越えてはならない。
- (d) スローオフを行うプレイヤーは、スローオフエリアの中でボールを持って動くことが許される。ただし、笛の合図の後にボールをドリブルすることは許されない。
- (e) スローオフを行うプレイヤーは、スローオフを走りながら行うことが許される。ただし、実施中にジャンプをすることは許されない。

※レフェリーの笛の合図後の不正なスローは、やりなおしではなく、相手チームにフリースローを与える。あるいは、レフェリーが笛を吹いて競技を中断する前に、スローを行うプレイヤーのチームがボールの所持を失った場合、そのまま競技を継続させる。(競技規則 15 の 7)

スローオフが完了したとみなす判断基準

- ・スローを行うプレイヤーの手からボールが離れ、さらにボールがスローオフエリアラインを完全に通過したとき。

※この判断基準は、ゴールキーパーズスローと同じ定義となります。

(競技規則12の2 ゴールキーパーの投げたボールがゴールエリアラインを完全に通過したとき、ゴールキーパーズスローを行ったと見なす。)

- ・スローを行うプレイヤーからパスされたボールを、味方のプレイヤーがスローオフエリアの中で触れた、あるいはコントロールしたとき。

スローオフ実施中のスローを行うチームのプレイヤーの位置

スローを行うチームのプレイヤーは、スローオフエリアの中を除き、笛の合図よりも前にセンターラインを踏み越えてはならない。もしも、センターラインを踏み越えていたならば、レフェリーは位置を正してからスローオフの笛の合図を行う。



スローオフ実施中の相手チームのプレイヤーの位置

スローオフを行うチームの相手チームのプレイヤーは、スローオフが完了するまで、スローオフエリアの外にいななければならない、スローオフエリアの中でボールやスローオフを行うプレイヤー、およびその味方のプレイヤーに触れることはできない。ただし、スローオフエリアのすぐ外にいてもよい。相手チームのプレイヤーが、違反した場合は、競技規則8の7(c)によりスポーツマンシップに反する行為として罰則が適用される。



4 パッシブプレーの予告合図後、パスの最大回数の変更

変更前 最大6回のパス→ 変更後 最大4回のパス

レフェリーはパッシブプレーの兆候を察知したとき、予告合図（ジェスチャー 17）を示す。これにより、ボールを所持しているチームはその所持を失わないように攻撃方法を改める機会を得る。

予告合図を出した後も、ボールを所持しているチームが攻撃方法を改めなかったときは、レフェリーはいつでもパッシブプレーの判定をすることができる。**最大 4 回のパスの後**、攻撃側チームがシュートをしなかった場合、相手チームにフリースローを与える。

パスの回数についての判定は、レフェリーの事実観察や判断に基づく。

プレーヤーが明らかな得点チャンスを意図的に放棄するなど特定の状況において、レフェリーは前もって予告合図を出していなくても、相手チームにフリースローを判定することができる。



新競技規則変更のねらい

今回の競技規則改正のキーワードは、「よりスピーディーに」「よりエキサイティングに」「よりプレーヤーの安心・安全のために」であると考えられる。2016年リオデジャネイロオリンピック以降、国際ハンドボール連盟は、60分間観衆を魅了するスピーディーなゲーム展開を求めてきた。その考え方を、「モダンハンドボール」という言葉で伝え、笛による試合の中断を可能な限り減らすためのレフェリングの工夫に取り組んできた。

そして、今回の競技規則改正により、2022年からは、「モダンハンドボール」に加え、よりスピーディーな魅力あるハンドボールを展開し、その中で、多くの得点が求められる際、防御するゴールキーパーの側に立った「安心・安全」の視点を追加したものである。

今回の競技規則改正の最大のポイント、『スローオフエリアの新設』『パッシブプレーの予告後のパスの最大回数の変更』は、まさに「よりスピーディーに」「よりエキサイティングに」を競技規則に明文化したとも言える。

スローオフエリアの新設により、スローオフを走りながら実施できるようになることで得点後のスローオフがよりスピーディーになり、攻守の切り替えは目を離せなくなるであろう。従来のコートにおけるセンターライン上でのスローオフの実施の際、スローオフのやり直しの必要な場面として、次のような例が考えられる。例えば、片足または両足がセンターライン上にない、走りながらあるいはジャンプしながらのスローの実施、ポイントに対するディフェンスの位置、ウィングの走り出しが早い、特に相手がゴールキーパーなしで攻撃している時はとても多い。スピーディーな展開の中で、そういった状況を瞬時に判断することは、レフェリーにとって容易なことではなかった。とりわけ、試合終了前の30秒間におけるスローオフでのディフェンスの位置は、勝敗を左右する重大な判定の判断基準である。この点から、スローオフエリアの新設は、スローオフの実施に際して、『正しい判定を導き出すための工夫』としても捉えることができる。

また、パッシブプレーの予告後のパスの最大回数が6回から4回に変更されることによって、攻撃側は早くシュートをねらえる局面まで組み立てる必要があり、**意図がない無駄なパス・動きは減っていく**ことであろう。近年の世界選手権のデータによると、パッシブプレーの予告合図後、男子では**2.9回**、女子では**2.5回**のパスで攻撃を終えている。また、約**82%**が4回以内に攻撃が終了しているというデータがある。(1回の攻撃にかかる平均時間は、男子では**35.3秒**、女子では**30.8秒**。1試合平均の攻撃回数の平均は、男子では**51.0回**、女子では**58.5回**。) こういったデータから、長時間の攻撃や攻撃の遅延を避けて、より素早い攻撃や防御への移行のため、パッシブプレーの予告後のパスの最大回数を4回とした理由の1つであると考えられる。

次に、『ボールの大きさについて、松ヤニの使用の有無で分類』するように変更されるのは、よりボールをコントロールしやすくし、**巧みなプレーを生み出し、よりエキサイティングなハンドボールにつなげたい**というねらいがあるからであろう。また、松ヤニを使用してきたことに伴う、プレーヤーの安全面(目に入る)や、ユニホーム・床・ゴールその他の施設への影響の面から考えても、**安心・安全な競技運営にもつながる**であろう。

最後に、『ボールがゴールキーパーの頭部へ直撃した際の罰則の適用』は、**ゴールキーパーの安心・安全につながる**改正と言える。従来は、ゴールキーパーの頭部へボールをぶつける行為について、7mスローの時のみ失格を適用するかどうかの判断しかなかった。スピーディーな展開が繰り返されていく中で、当然ながら得点機会も多くなる。**ゴールキーパーへの負担もこれまで以上に考慮していかなくてはならない**。今回の改正によって、従来の7mスローの時の失格の適用に加え、明らかな得点チャンスの際、シュートを打つプレーヤーとゴールキーパーの間に、防御側プレーヤーが誰もいない状況で、ゴールキーパーの頭部へボールが直撃した場合、**2分間退場の適用という選択肢が増える**ことになる。そのことは、ウィングシュートや速攻時など、従来のルールでは罰則の適用条文はないため、単に「ナイスキーパー」で終わっていた状況から、ゴールキーパーの安心・安全を守る術を持ったルールへの改正と言える。このことは、シューターにとって、ゴールキーパーの頭部付近へシュートを安易にねらえない心理的な歯止めとなるとともに、**ゴールキーパーの頭部にボールをぶつけないようにシューターには回避義務がある**ことを明文化したとも言える。

このような今回の競技規則改正により、さらなる競技の発展につながり、ハンドボールをする人・観る人にとって、魅力あるハンドボールがより一層多くの人から愛されるようになればと期待する。

